

今日は福音書に選ばれている、「十人のおとめ」のたとえを話します。これは結婚式の話ですね。

最初にクイズですが、ユダヤ人は、一週間の内で、どの日を結婚にふさわしい日、と考えていたでしょうか？土曜日はダメですね。安息日ですから、神様を後回しにして自分たちの用事をしてはいけません。創世記の1章を根拠にして、火曜日がふさわしい。日本風に言えば、火曜日が大安になるようです。

どうしてかと言うと、神様は最初の6日間で世界を造られたのですが、第三の日には「良しとされた」という言葉が2回出てくるから縁起がいいのです。思い出してください。ヨハネによる福音書2章で、イエス様が水をぶどう酒に変えた、奇跡物語がありますが、その書き出しは、「三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母もそこにいた。」と書かれています。ヘブライ語では、日曜日は第一の日、月曜日は第二の日という言い方をしていくので、火曜日は第三の日ということになるのです。

皆さんは屋根の上のバイオリン弾き、の映画を観られたことがおありでしょうか。東ヨーロッパ、ウクライナに住むユダヤ人たちの生活を描いたものですが、主人公に5人の娘がいて、長女の結婚式の様子が詳しく紹介されていました。結婚式は、夜に行われるんですね。日が沈む頃、みんながローソクを持って、式場に歩いているのですが、式が始まると、バックミュージックに「サンライズ・サンセット」陽は昇り、陽は沈むという歌が流れて、特にこの映画を有名にしたものだと思います。

今日の福音書には、イスラエルのイエス様の時代の結婚披露宴のことが書かれています。結婚式はやはり夜に行われて、花婿が花嫁の家を訪ねて、みんな一緒に、結婚式の会場になる花婿の家に歩いて行くわけですね。

映画では楽隊が楽器を鳴らし、手に手に、みんなローソクを持ちましたが、イエス様の頃には、花嫁の家に待っている乙女たちが、手に持ったともしびで、花婿たちが来たらみんなを披露宴の会場になる花婿の家まで案内したのでしょうか。

イエス様は、世の終わりに、もう一度イエス様が来られるのを待つクリスチャンたちの心構えを、この花嫁の家で待つ、ともし火を燈して、会場まで案内する乙女たちにたとえられたのでしょうか。

この福音書が書かれたのは、イエス様が十字架に架けられて50年くらい過ぎた頃なので、弟子たちの多くがもう亡くなって、イエス様はいつになったら来られるのか、というイライラした気持ちが、教会の中であって、それに対する答えとして、あたかもイエス様が話されたかのように説明されたお話だ、と言えるシラケてしまうのでしょうか。しかし、その頃の教会の指導者たちが、どのような心構えでイエス様の来られるのを待ったのか、知るためには大変重要な箇所です。

おとめたちには、賢い5人と愚かな5人がいました。賢い5人は、花婿が来るのがいつになるかわからないので、余分に油を用意していました。ところが、愚かな5人は、この油で十分だと思って、余分には持っていなかったのです。

今日のお話の結論は、おそらく13節の言葉でしょう。

「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」と書かれています。

でも、「目を覚ましていなさい。」というのが結論なら、どちらの5人もみんな「眠気がさして眠り込んでしまった。」というのですから、その教えに従えず、不合格になってしまいます。賢いおとめたちは、良い方の例としてあげられているのですから、眠ること自体は悪くはないのでしょう。疲れたら、寝てしまうのは、肉体を持った人間としてしかたないことです。

問題は、花婿が来た時に、油の準備があったかどうかです。賢いおとめたちは、花婿が来る時刻がいつになるのか、知らないで、来た時あわてないように、あらかじめ用意をしていた。ところが、愚かなおとめたちは、「花婿が来るのが、いつになるのか、自分は知らないのだ、わからないのだ」ということさえ、知らなかった。逆に、「自分が灯を燈している間に来るものだ。」と自分の予想に自信を持ってしまっていたので、その予想が外れた時、対処のしようがなかったのです。

「無知の知」という言葉を聞かれたことがあるでしょう。哲学者ソクラテスの言葉です。自分自身が無知であることを知っている人間は、自分自身が無知であることを知らない人間より賢い。真の知への探求は、まず自分が無知であることを知ることから始まる。

ソクラテスの場合は、知恵ということについてでしょうが、私たちクリスチャンの場合の「無知の知」は、神様の計画のことだろうと思うのです。イエス様がいつ来られるのか、世の終わりはいつなのか、それは神様にしかわからないことだ、とイエス様も言っておられます。それなのに、私たちは神様との馴れ合いみたいな関係を勝手に作ってしまって、それに甘えて、謙虚さが失われているのではないかと感じます。

身近な例を挙げましょう。皆さんは、車の運転をするのに、「だろー運転」と「かもしれない運転」というのがあるのをご存知でしょうか。自動車学校や警察の免許更新の時によく聞く言葉です。

「多分、大丈夫だろう」と自分に都合よく考えて、一方的に安全だと思い込み運転することを、一般に「だろー運転」と呼んでいます。その結果、「まさか、そうなるとは思わなかった」というような、思わぬ出来事が起きることがあります。その危険を回避するためにはどうしたらよいか。

それには、自分自身で、本当にその判断は正しいかどうか、考える視点が必要です。そのためには、「人が出てくるかもしれない」、「前の車が急に止まるかもしれない」など、自分が置かれている状況から、その先のあらゆる「~かもしれない」を考えて、注意を向けることです。

愚かなおとめたちは、自分に都合よく思い込みで、余分な油を用意しませんでした。一方、賢いおとめたちは、もしかしたら、自分の予想を超える事態が発生するかもしれない、と油を余分に用意しました。

このようなことが私たちの教会にも起こったことを皆さんはご存知でしょう。

6年前の10月、長崎の聖公ビルとテナント契約をしたカネボウ社が出て行って、収入がなくなる、という出来事が起きたことがありました。教区の事業収入の60%を占めるカネボウ社の家賃、年間2700万円が入らなくなったのです。もう何年も前から、苦しい経営のカネボウ社は出て行くのではないかと、ということはささやかれていました。しかし、「まだ大丈夫だろう」ということで、対策も考えないまま、契約通り、突然、出て行くことをその半年前の3月に知らされたのです。ところが、そのような事態になったのに、危機感が伝わってきませんでした。大丈夫だと高を括って、それがはずれてしまっても、それに対する対応が、できないままだったのです。それからの6年、ビルは取り壊されて、駐車場になり、今はその土地を貸すことが計画に入っていますが、財政再建にはほどとおい、教区の痛手は深まっているように思います。

わたしたちは「何とかなるだろう。」という気持ちになりやすい。しかし、そうではなく、「もう代わりのテナントも入らないかもしれない」という気持ちで、対処を考えなければならなかったのです。収入が減る分、今までの支出の中で、無駄なことは止めるような努力が必要でしょう。そのような対応は、もうこのことが発生する前から、今日の福音書にある、余分に油を用意していた賢いおとめたちのように準備する謙虚さが必要だったのではなかったでしょうか。

私たちの思い込みや、馴れ合い、甘えに対する警告として、ヤコブの手紙の中にこんな言葉があります。

◆誇り高ぶるな

4:13 よく聞きなさい。「今日か明日、これこれの町へ行って一年間滞在し、商売をして金もうけをしよう」と言う人たち、

4:14 あなたがたには自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎません。

4:15 むしろ、あなたがたは、「主の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう」と言うべきです。

4:16 ところが、実際は、誇り高ぶっています。そのような誇りはすべて、悪いことです。

4:17 人がなすべき善を知りながら、それを行わないのは、その人にとって罪です。

私たちは、もっと謙虚に振る舞うことを、この「十人のおとめ」のたとえから学ぶべきでしょう。私たちの世界は、私たちよりもっと大きな存在によって動かされ、支えられていることを知しましょう。